平成23年8月1日発行　第560号（毎月1回1日発行）　平成13年5月11日　第三種郵便物認可

明日の福祉と医療を創るワム

WAM

8

2011

- 特集
  株式会社、NPO法人等も「こども園（仮称）」への参入が可能に
- 福祉・医療最前線
  埼玉県ふじみ野市・医療法人社団富家会
- WAMレポート
  社会福祉法人の会計基準の一元化について③

独立行政法人福祉医療機構

隣接する病院と連携し、重医療・重介護高齢者が安心して暮らせる「住まい」を展開

― 埼玉県ふじみ野市・医療法人社団富家会　メディカルホームふじみ野 ―

高齢化の急速な進行に伴い、慢性疾患をかかえる高齢者が増えている。今号では、病院に隣接した適合高専賃を開設し、医療必要度の高い入居者を受け入れ、必要な医療・介護サービス等を提供して、入居者の生活を支援している医療法人社団富家会メディカルホームふじみ野を訪ねた。

重医療・重介護の高齢者を積極的に受け入れる適合高専賃

医療法人社団富家会は昭和55年3月、埼玉県入間郡大井町（現ふじみ野市）に富家病院（139床）を開設した。「されたい医療、されたい看護、されたい介護」を理念に掲げ、重度の慢性期医療を必要とする患者を積極的に受け入れてきた。現在は、202床（特殊疾患病床56床、回復期リハビリ病床28床、障害者病床29床、療養病床89床）と人工透析室21床となっている。

富家会では平成21年12月16日、富家病院に隣接する土地に適合高齢者専用賃貸住宅「メディカルホームふじみ野」（以下「メディカルホーム」）を開設した。適合高齢者専用賃貸住宅とは、専ら高齢者を賃借人とする賃貸住宅のうち、厚生労働省が定める面積基準等を満たすものとして、都道府県知事に届け出た住宅のことである。メディカルホームでは、病院でも施設でもない「新しい住まい」として、入居者が安心して暮らすための支援を行っている。

施設長の大竹裕氏は、「富家病院では、重度の慢性期疾患の方を診てきました。そういった患者さんが安心して暮らせる"住まい"をつくりたいと思っていたところ、平成19年5月に医療法が改正され、医療法人も附帯業務として高専賃を開設できることになったため、施設より自由度の高い"住まい"で、入居者が望む医療・介護・生活を支援する高専賃を建てることにしました」と振り返る。

入居者が家族に自慢できる住まいに

メディカルホームは、3階建てで43室ある。全室個室（トイレ・洗面所・収納付き）でプライバシーが守られており、居室面積は18・68㎡、車いすでも自由に移動することができる。誰でも使えるリビング・ダイニングが各階にあり、入居者の食事、遊びに来た家族との談笑など、さまざまな用途で利用され、住まいとしての高級感を意識したしつらえとなっている。

入居者の具合が悪いときは、家族が宿泊して看病することもある。元気な入居者のもとに、定期的に泊まりに来る家族もいる。

「例えばお孫さんに『かっこいいところに住んでいるね、おじいちゃん』と言ってもらえるような、入居者にとって自慢の住まいにしたいと考えています。家族が自由に出入りして、また来たいと思ってもらえるといいですね」（大竹氏）。

施設や病院とは異なる造りで、家庭的な雰囲気にこだわったことが功を奏し、入居者から「ここに入居できてよかった」という声を聞くことも多いそうだ。

「スチールパネル工法」という超薄型軽量鉄骨を利用する建築方法を採用して初期投資を抑え、リーズナブルな家賃設定を実現した。この工法は、耐火・耐震も優れており、駆体も芸術品のような美しさである。

「何より施工を担当する株式会社シルバーウッドさんが、富家理事長の熱い思いを受け止め、施主の気持ちに最大限応じてくれたことがすばらしい結果を生むこととなりました」（大竹氏）。

メディカルホームのスタッフは、大竹施設長のほか、事務、訪問看護師8人、介護スタッフ19人で編成されている。接遇にも力を入れており、みんな明るい。介護スタッフの約半数が男性であり、重介護の方の移乗介助にも心強い存在といえる。訪問看護師は日中の勤務で、介護スタッフは、24時間勤務体制で常駐している。

富家会では、スタッフの教育に力を入れている。富家病院では、昼食時に弁当を食べながらの「毎日勉強会」を実施しており、定員20人の会場は常に満席である。外部研修にも積極的で、法人理事長・富家病院院長の富家隆樹氏が常任理事を務める日本慢性期医療協会主催の「医療介護福祉士認定講座」や「慢性期医療認定講座」の修了者も多数いる。メディカルホームのスタッフも研修の機会は多く、仕事へのモチベーションアップにつながっている。

要介護度が上がるにつれ家賃を安く設定

入居費用は、「要介護度が重い人でも、必要な介護サービスを受けながら、安心して生活できるようにしたい」という思いから、要介護度が上がるにつれて安くなる仕組みとなっている。別途、食費を支払えば、1日3食分用意してもらえる。入居費用には、共益費なども含まれており、必要に応じて掃除などの家事サービスも無料で行うため、追加費用は発生しない。

「要介護5で透析を受けている方の場合、家賃は格安になります。母体である富家病院での医療や介護サービスを利用していただき、全体で収支が見合うように考えています。とくに介護サービスはご本人の選択に基づいて提供するので、私たちの介護サービスを選択していただけるよう、スタッフの質を維持、向上する努力や研修を重ねています」（大竹氏）。

なお、当初から重度の慢性疾患

医療と介護が融合した「住まい」のモデルに

訪問看護師長　和田 由美氏

メディカルホームの訪問看護師長として着任してから、丸1年になります。以前は、主に病院勤務の看護師をしており、18年目になります。

高専賃で透析を行うのは初めての試みだと思うので、医療と介護を融合させた理想的な形を作り上げて、次につなげていくことに、やりがいやおもしろさを感じています。

一方で、「住まい」なのに透析などの医療が頻繁に入るため、干渉されたくない方からすれば迷惑かもしれません。どこまで介入するかを悩むこともあります。

富家会では、「ナラティブ（物語）支援」を実施していて、高専賃の入居者にも一人ひとりその人の生活を綴ったノートがあります。私たちは疾患やＡＤＬばかりでなく、人柄や人生を知り支援することが大事と感じることができました。

メディカルホームでは看取りを支援していて、家族や私たちスタッフが寄り添い、最期まで見送ることができます。

これからも、入居者や家族からいろいろな意見を聴いて、柔軟に対応していきたいと思います。

施設の概要

医療法人社団富家会 適合高齢者専用賃貸住宅

メディカルホームふじみ野

〒356－0051　埼玉県ふじみ野市亀久保2196
TEL 049－293－3216　FAX 049－293－3218

▲富家病院に隣接するメディカルホームふじみ野（右側）

開設年月日：平成21年12月
理事長：富家　隆樹
施設長：大竹　裕
建物構造：地上3階建（スチールパネル工法）
居室総数：43戸（1階11戸、2階16戸、3階16戸）
居室設備：地上波アンテナ、インターネット接続口、電話回線、玄関引き戸扉、タンス、収納棚、手すり、ナースコール、防災設備、空調換気設備、照明器具、エアコン、カーテン、トイレ
共用施設・設備：エントランスホール、フロント、リビングルーム、ダイニングルーム、寝台用エレベーター、一般浴室、共用トイレ、洗濯室、スタッフルーム、介護浴室、ナースコール、食品庫、厨房室、リネン室、汚物処理室、防災設備
職員数：29人（施設長、事務、看護職：8人、介護職：19人）（平成23年6月現在）
関連施設：富家病院（202床〈特殊疾患病床56床、回復期リハビリ病床28床、障害者病床29床、療養病床89床〉、人工透析室21床）、富家千葉病院、富家在宅リハビリテーションケアセンター（クリニック〈外来透析〉、デイケア室、居宅介護支援室、訪問リハビリ室、在宅・訪問診療などを併設）、社会福祉法人樹会 特別養護老人ホーム大井苑（定員95人、ショートステイ5人併設）

患者の入居を想定していたこともあり、居室で人工透析を行うことができる。短時間（1回2時間）の透析を週6日行うことで、入居者の身体への負担を減らし、より快適に生活できるように配慮している。現在、透析を実施している入居者は9人にのぼるが、平均要介護度は2・11で自立度の高い方が多く、状態は安定している。

隣接する病院との連携で急変時にも素早く対応

入居者全体の平均要介護度は2・75で、要介護3以上の重度者が半数を占める。"住まい"である高専賃で、これだけ重度の人を受け入れている事例は、あまり多くない。緊急時や急変時に、隣接する富家病院の全面的バックアップがあるからこそ、素早い対応ができる。「徒歩0分」の近さと連携のとりやすさが最大のメリットである。

▲アジアンテイストのリビング・ダイニングは、食事・談話・自治会などさまざまな用途に利用される

「富家病院と連携し、最大限助けてもらえますから、スタッフも安心して仕事に励むことができます」（大竹氏）。

病院と隣接しているメリットは、それだけではない。日中、体調がすぐれなければ、すぐに医師に診てもらうことができる。入院することがあっても、訪問看護師や介護スタッフが頻繁に見舞いに行ける。入退院時の申し送りもスムーズで、情報はもれなく共有できる。

「重度の入居者が多いため、病院と連携した素早い対応が求められます。それをスタッフも実感し、努力してくれています」（大竹氏）。

入居者は、医療機関からの紹介が多かったという。介護保険の住所地特例が適用されるため、前住所地の被保険者も多いが、半数程度はふじみ野市に住所を移している。

医療必要度の高い高齢者は、特別養護老人ホームや老人保健施設では、なかなか受け入れてもらえない。このような入居者を積極的に受け入れたことで、退院予定者の受け入れ先を探していた医療機関等からも喜ばれた。

重度の入居者が多いため、入院することもあるが、スタッフが入院先の富家病院等に見舞いに行くと、「早くメディカルホームに帰りたい」「みんな元気か?」等と言われることもある。入居者に「わが家」という意識があるのだろう。

単身者向けの居室となっているため、別々の病院に長年入院していたある夫婦は隣どうしの2部屋に入居した。妻は、富家病院に入院して亡くなったが、少しの間ではあるものの夫婦で一緒に過ごすことができ、入院してからも夫は足しげく見舞いに通い、看取ることもできた。

自治会で話しあい入居者と一緒につくる住まい

メディカルホームは「施設」ではないため、入居者が一堂に会するような行事は基本的にはないが、入居者全員で構成される自治会「さくらの会」を月2回開催し、メディカルホームでの生活について話しあっている。

「私も出席していますが、『食事をもっとこうしてほしい』『金魚を飼ったらどうか』『畑をやりたい』などの話もあり、入居者と一緒につくっていく『住宅』という実感があります」（大竹氏）。

介護サービスを充実させ在宅の安心生活を支援

富家会は、介護保険事業にも力を入れている。平成23年4月11日には、近隣に「富家在宅リハビリテーションケアセンター」を開設し、ここに介護保険の居宅サービス事業を集約させた。居宅介護支援センター・訪問リハビリ・訪問看護・訪問介護・福祉用具事業所のほか、クリニックも併設し、人工透析（15床）を受けることもできる。なお、クリニックは訪問診療もできるように、在宅療養支援診療所の指定も受けた。デイケアセンター（定員40人）も併設している。また、ふじみ野市から委託を受けて、老人デイサービス事業を実施している。

同じグループの社会福祉法人樹会では、特別養護老人ホーム大井苑を開設している。ここでは、デイサービス事業を実施するほか、ふじみ野市からの委託で、地域包括支援センターを2カ所と、障害者相談支援センターも運営している。障害者でも高齢者でも24時間いつでも相談できる窓口「ふくまど」も自主設置している。

メディカルホームの入居者が介護保険サービスを受けたい場合、富家在宅リハビリテーションケアセンターに併設されている居宅介護支援センターで、メディカルホーム担当のケアマネジャーが、ケアプランを立てている。ケアプランは、入居契約の際、家族にも説明している。

「介護サービスについては、入居される方に不足することがなく、必要なサービスを選んでいただけるように、ほぼすべてのサービスをそろえています」（大竹氏）。

70戸増築で「住まい」ニーズに応える

メディカルホームは現在、増築工事を行っている。70戸増築し、平成23年後半には竣工予定である。平成22年度の高齢者等居住安定化推進事業の生活支援サービス付き高専賃として、国の助成を活用している。

大竹氏は、「大幅な増築なので、満室にするには相当な努力が必要だと思います。これまでと同様、透析の方や重度の方を受け入れていきたい。ニーズはあると考えていますが、まずは、重度の方をしっかり支援できる体制を整えなければと思っています」と語る。

喫緊の課題は、富家病院・富家在宅リハビリテーションケアセンターなど、今ある社会資源を有効に活かせるように、それぞれが高い意識を持って、さらに連携を強化することだという。

平成23年4月29日に公布された「高齢者の居住の安定確保に関する法律の一部を改正する法律」により、公布から6カ月以内に高専賃等の登録制度は廃止される。代わりに、面積要件や状況把握・生活相談サービスなどの要件を満たしている住宅は、「サービス付き高齢者向け住宅」として都道府県に登録することとなる。

メディカルホームは、条件を満たしているため、サービス付き高齢者向け住宅の登録を申請するとしている。

なお、富家会は、グループ内の連携だけでなく、地域のネットワークづくりにも取り組んでいる。4年前から、ふじみ野市を中心に、医療機関・ケアマネジャー・介護関係者等に声をかけて、地域の高齢者を支える医療・介護・看護の連携強化を目指す「地域リハケアネットワーク」を立ちあげた。以来、多数の事業者で毎年交流を図ったり、講演会を行っている。※グループウェアで情報交換できる仕組みも構築した。

定期巡回・随時対応型訪問介護看護開始も視野に

また、平成23年6月22日に公布された「介護サービスの基盤強化のための介護保険法等の一部を改正する法律」により、平成24年4月から、「定期巡回・随時対応型訪問介護看護」が、地域密着型サービスとして創設される。これは、訪問介護と訪問看護が連携して24時間対応の訪問サービスを行うものである。

現在、メディカルホームでは、夜間の看護師が配置されていないため、夜間に医療行為が必要な人や認知症の人などに、完全に対応できているとは言いがたい面がある。

大竹氏は、「介護報酬がどうなるか、まだ示されていませんが、メディカルホームの入居者だけでなく地域住民にもニーズがあると思うので、ぜひ実施したいですね」と意欲的である。

地域密着型サービスは、住所地特例で他市町村の被保険者になっている場合は利用できないため、利用を希望する入居者には、ふじみ野市に住所を移してもらうよう、勧奨することになる。

重度の高齢者が安心して暮らすことができる住居を提供するとともに、介護サービスなどの選択肢も多数用意している富家会は、これからも地域の慢性期疾患をかかえる高齢者を、全力で支援していくことだろう。

地域の慢性期医療のセーフティネットに

メディカルホームふじみ野
施設長 大竹　裕氏

富家グループでは、医療・介護のさまざまな社会資源を用意してきました。在宅の高齢者であれば、今年4月に開設した「富家在宅リハビリテーションケアセンター」でさまざまな支援、常時医療の必要がなければ「特別養護老人ホーム大井苑」に入所、透析しながら状態が安定しているなら「メディカルホームふじみ野」に入居、重症で常時医療が必要な場合は「富家病院」に入院――というように、多様な選択肢があります。

地域の慢性期疾患の方が、安心して生活できるような支援体制を整え、地域の方に「困ったら富家グループに相談しよう」と思っていただけるように、今後も研鑽を重ね、質の向上に取り組んでいきます。

※グループウェア…組織内のコンピューターネットワークを活用した情報共有システム